

貫く棒の如きもの

中央仏教学院講師 寺川 幽 芳



はや今年も12月一、繁華街を行き交う人波を急きたてるように、ジングルベルの音を乗せた北風が吹き抜けてゆきます。歳末大売り出しが、いつしか歳末商戦と呼ばれるようになり、その時期も年々早くなり、すでに10月中旬になると、各家庭にもずっしりと重いお歳暮のカタログが送られてきます。そこには、「先手必勝」というより「先制攻撃」という言葉に近い、競争社会の非情さが垣間見えるようです。実際、華やかな表通りの賑いから少しはずれると、まるで別世界のように閑散とした路上を、捨てられたチラシやポリ袋が木枯らしに舞っている光景が目に入ります。

毎年、大晦日おおみそかにはNHKの「ゆく年くる年」という番組が、各地の越年の風景を伝えていますが、この「ゆく年くる年」という表現に似た「去年今年」という言葉があります。この言葉は俳句の新年の季語とされていますが、高浜虚子は「去年今年 貫く棒の如きもの」という一句を詠んで、この言葉に計り知れぬ深い意味を見出しました。「貫く棒の如きもの」とは、一体いかなる心象を意味しているのでしょうか？それは、一人一人の心象の世界に他なりません、私にとっては、去年と今年を隔てる「時」が、実に不即不離であり、悠久の「いのち」を観つめることを教えられる思いでした。しかし、まさしく去年今年、その「棒の如きもの」は、そうした深い安らぎの世界を覆いつくそうとする、重苦しいものとして意識されました。それは、自己中心性が肥大する五濁悪世ごじやくあくせの実感です。

自由競争や規制緩和の名のもとに、勝ち組と負け組を峻別する傾向が肥大化し、格差の拡大や弱者切り捨てを是とする考えや行動を助長する結果をもたらしました。先日、テレビで、投石してガラスを割った子の親に注意したところ「そこに、投げる石があったのが悪い」と文句を言われたという話をしていました。「いじめ」が陰湿化し、教師による「いじめ」が多発するに至っては、言うべき言葉も見つかりません。教育基本法の改正や憲法改正論議もさることながら、核武装の話まででるようでは、幾百万の尊い犠牲のうえに不戦を誓い、核廃絶の願いのもとで守り抜いてきた先人の平和への努力を打ち砕くことになりかねません。こうした現実にも目を向けると、「貫く棒の如きもの」とは、歴史に学び歴史を教訓として活かせるかどうか—という問いかけに他ならないと考えられます。「殺すなかれ。殺さしむなかれ」という仏説を仰ぐ仏教徒の平和を願う心と行いが、いま問われているのです。

自由競争や規制緩和の名のもとに、勝ち組と負け組を峻別する傾向が肥大化し、格差の拡大や弱者切り捨てを是とする考えや行動を助長する結果をもたらしました。先日、テレビで、投石してガラスを割った子の親に注意したところ「そこに、投げる石があったのが悪い」と文句を言われたという話をしていました。「いじめ」が陰湿化し、教師による「いじめ」が多発するに至っては、言うべき言葉も見つかりません。教育基本法の改正や憲法改正論議もさることながら、核武装の話まででるようでは、幾百万の尊い犠牲のうえに不戦を誓い、核廃絶の願いのもとで守り抜いてきた先人の平和への努力を打ち砕くことになりかねません。こうした現実にも目を向けると、「貫く棒の如きもの」とは、歴史に学び歴史を教訓として活かせるかどうか—という問いかけに他ならないと考えられます。「殺すなかれ。殺さしむなかれ」という仏説を仰ぐ仏教徒の平和を願う心と行いが、いま問われているのです。

(龍谷大学名誉教授：宗教担当)